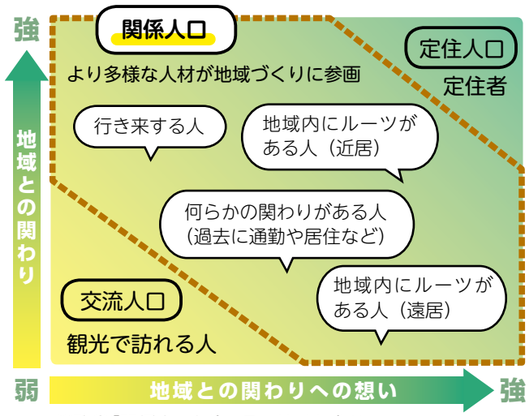
関係人口とつくる
チイキノミライ

日本は、人口減少、少子・高齢化により地域づくりの担い手不足の課題に直面しています。そんな中、関係人口と言われる地域へ多様な形で継続的に関わる人々が現れています。地域の未来を誰とどのようにして作り上げていくのか。今月号では、地域の未来を考えます。

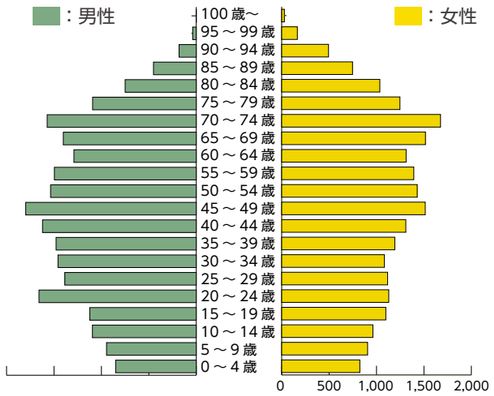
関係人口ってなに？

移住した定住人口でもなく、観光にきた交流人口でもない、地域と関わる人のことを指します。



総務省「関係人口」ポータルサイト（https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou）をもとに作成

市の年齢構成ピラミッド



資料：住民基本台帳（令和 3 年 1 月 1 日現在）

団塊の世代が 70 歳以上になり、子どもの人口に膨らみがなく、少子・高齢化が進んでいます。

人口が減る日本

昨年実施した国勢調査の速報値が 6 月に発表され、平成 27 年に実施した前回調査に続き、日本の人口が減少したことが分かりました。地域別で見ると東京都、神奈川県など都市部の 9 都府県で人口増加した一方で、地方では人口減少が進行。三重県では前回調査から減少割合が増え、さらに人口減少が進んでいます。

いなべ市では、住民基本台帳によると出生数が死亡数を下回る状態が続いており、人口が微減しています。この 10 年で、高齢化率は 22.8% から 28.8% に上昇し、超高齢社会を迎えています。15 歳以下の割合は 13.8%から 12.2%になり、少子化も進んでいます。

地域づくりの担い手不足に

地方で人口減少、少子・高齢化が進むと、経済規模の縮小、労働力不足などさまざまな課題に直面します。そして、地域づくりの担い手不足が深刻な課題になります。平成 26 年に「まち・ひと・しごと創生法」が施行され、国は地方創生のスローガンのもと、地方の人口減少の歯止めをかけ、東京一極集中を是正する政策を掲げました。そんな中、地域外から積極的に地域に関わろうとする関係人口と呼ばれる人たちが登場し始めました。平成 30 年には、総務省が「関係人口」創出事業を実施するなど、地方での地域づくりの新たな担い手として期待されています。

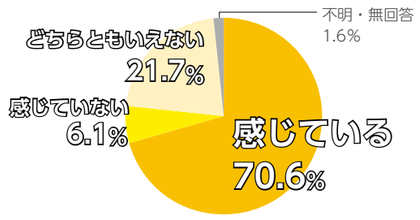
関係人口の登場で未来は安泰？

関係人口の登場で、地域の未来は安泰になるのでしょうか？そうではありません。関係人口は、地域づくりを全て担ってくれるスーパーマンではないのです。

地域には、その空間でしか味わえない魅力的な資源（ヒト・モノ・トキ）があります。その魅力に引き込まれて地域外から市を訪れて、何度も通うと愛着が生まれていきます。「何度も訪れるうちに」「生まれた所だから」と愛着が生まれる理由は人それぞれ。共通するのは、地域への愛着は地域づくりの原動力になるということ。地域に魅力を感じ、それが愛着になって地域づくりへの参画に結びついている動きを紹介します。

市内中学生の愛着度がアップ

いなべ市に愛着を感じますか？



令和元年に実施した「市民満足度（中学生調査）」で、市に愛着や親しみを感じるかについて聞いたところ、7 割が「感じている」と回答。58.5%だった平成 26 年の調査から大幅に上昇。若い世代に、ふるさとへの愛着が育まれています。

1. okudo 中村舎の前に並ぶ運営メンバー。月に一度集まり、片付けや畑の手入れなどを行っている 2. この古民家を活用する決め手になったおくどさん 3. おくどさんで炊いたご飯をみんなで味わう。メンバーの佐藤美紀さんは「親戚の集まりみたい」と話す

いなべのヒト・モノ・トキに魅力を感じて、積極的にいなべに関わる人たちがいます。
共通して見えてくるのは、いなべを「い～な」と思う気持ちです。

人と人をつなぐ

通う側から迎える側に

平成30年4月から3年間、市の地域おこし協力隊として移住促進の活動をしてきた山崎基子さん。いなべに移住したい人と、市内で空き家の管理に困っている持ち主とを結びつける「移住おたすけ隊」になって、14組の移住に関わってきました。

四日市市に住んでいた山崎さんは、元々田舎暮らしに憧れがあり、いなべ市に住む友人の意見を参考に移住を考えるように。3、4カ月ごとにいなべに通っては空き家を探しましたが、なかなか見つかりませんでした。実際に、いなべに移住するまで2年半かかったそうです。「空き家はあるのに、移住が出来ない…」そんな苦労をしたからこそ、移住促進に関わろうと決心したそうです。

「なんでこんなところに来たん？」

移住希望者に空き家を紹介する中で、地域の人から「なんで、わざわざこんなところに？」と言われることもあったそう。

「空の広さや静寂さ、夕日の美しさなど、いなべの魅力はたくさんあります。長年住んでいる人と、よそ者の私では、違う視点で見ることができる。それがとても大切だと思う」と教えてくれました。

外の視点だからこそ気付く魅力

いなべの魅力は、「人」と話す山崎さん。いなべに来て、地域の人が子どもたちに挨拶する姿に驚いたそうです。

「都会では大人が子どもに話しかけることが少ないので、びっくり」いなべならではの人と人とのつながりを温かく感じるそうです。地域の魅力的な人々と関わるうちに、地域の人とよそ者の交流が盛んになると良いなと思うように。

古民家を「みんなの拠点」に

令和元年5月に、藤原町西野尻でおくどさん（かまど）がある古民家と出会います。その古民家を修繕し、今年6月に「okudo 中村舎」という地域の活動拠点をオープンさせました。集う人々とおくどさんを囲みながら、学び合える空間にしたいとの想いから「舎」という文字を使用。山崎さんは「地域の人とよそ者が協力して、面白い化学反応が起こる場になれば」と期待しています。

いなべに通うことから始め、移住者を迎え、地域の拠点づくりに至るまで、さまざまな関わり方を経験した山崎さん。その姿は、関係人口に多様な関わり方があることを体現しているようです。

「okudo 中村舎（おくど なかむらや）」ってどんなところ？

藤原町西野尻 1040
Tel.37-4014
［定休日］日・月曜日
※令和4年1～3月は工事のため休館

築200年の古民家を修繕し、地域の活動拠点として運営しています。現在、山崎さんを含めて7人の運営メンバーがいます。時間制のコワーキングスペースやレンタル会議室として利用可能。令和4年4月から「かまどごはん屋さん」にリニューアル予定。そのほか、いなべの食を体験できるワークショップを随時開催。

メンバー手作りの中村新聞は月1回発行

山崎さんのまわりに集まる「okudo 中村舎」の運営メンバー

城 裕介さん

3年前にいなべに移住。市が発行した「暮らしを旅する」を見て、いなべへの移住を決意。いなべっこで見慣れない野菜を知ることが楽しみ。

佐藤 美紀さん

いなべ生まれ藤原町西野尻在住。地域の人と外から来る人をつなぐ役割を担えればと参加。郷土料理を大切にしたいとの思いから、食のイベントを企画。

三輪 真紀さん

結婚を機に藤原町篠立に住んで13年目。雪深い地区で、地域の人々が助け合う姿を目の当たりにし、人のつながりが深いと実感。親切な人が多い！

和田 木綿子さん

2年前にいなべに移住。四季の移ろいが身近にあることに豊かさを感じる。いなべの良さを知るうちに、遠く離れた地元の良さにも気付けた。

和田 両磨さん

転勤を機にいなべに移住。今住んでいる家は山崎さんが仲介。自治会の組の役では地域のつながりを感じる。地区の草刈りもまちづくりだと思う。

隈元 寿実さん

四日市市在住。いなべの山や人が好きで、毎日いなべを訪れている。人が好きなので、okudo 中村舎を気軽に話が出来る場にしていきたい。

1.「日本のまんなか♡いなべ山女子フェスタ」実行委員会の仲間を通じて竜ヶ岳の登山道整備に参加 2. 整備作業の合間に休憩 3. いなべの山の魅力を伝える冊子「いなべの渋山」

登山で訪れ「ここに住みたい！」

「山が好き」が「いなべが好き」に

越智さんといなべ市の出会いは、4年前に趣味の登山で藤原岳に来たこと。当時、奈良県に住んでいた越智さんにとって、初めて訪れるいなべの地は別世界に映ったそう。麓に広がる景観、心地よく吹く風、季節の畑の様子、空の広さや静けさ。人の少なさすら魅力に感じたと話します。思わず「ここに住みたい！」と友人に伝えるほど、この地域一帯の空気に魅了されていきました。

いなべの山の魅力を伝える側に

家族の都合で、令和2年3月に奈良県から桑名市に引っ越した越智さん。いなべに惹かれ、毎週、いなべを訪れていたそう。そんな中、立ち寄ったイベントで、「日本のまんなか♡いなべ山女子フェスタ」の実行委員会に誘われ、加入することに。昨年は、いなべの山の魅力が伝わる冊子の作成に関わりました。

越智さんは「鈴鹿山脈は関西でも人気で、登山仲間の中では藤原岳や竜ヶ岳は憧れの的なんです」と話します。SNSを利用し、登山仲間に向けていなべの山や自然の情報を発信すると反響が大きいそう。

登山で知ったいなべの魅力。いなべに通いながら、越智さんならではの発信が続いていきそうです。

いなべの山の魅力を発信

「日本のまんなか♡いなべ山女子フェスタ」実行委員会

ワークショップや交流会、登山を通していなべの山の魅力を存分に楽しむイベントの企画・運営をしています。昨年は、冊子「いなべの渋山」を発行をしました。

◀平成30年に行ったイベントの様子

越智さん注目の「夢が叶う車」

Mobile-HÜTTE（モバイルヒュッテ）

市は、軽トラックに搭載可能な屋台ユニットを乗せて、さまざまな活用方法を検証しています。

越智さんは「いつか山登りの人向けのお店がしたいという夢があります。市のイベントで見たモバイルヒュッテは、まさに夢に描いていた移動できる屋台。夢にチャレンジできるのではと、可能性を感じます」と話します。

1. 阿下喜祭好会のメンバー 2. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、八幡祭は2年連続で中止に。阿下喜の誇りである八幡祭への想いをつなげようと地域に呼びかけ15分の映像を制作し上映 3. 祭りを楽しみにしていた子どもたちに思い出を作ろうと、昨年はイベントを開催

離れても地元と自分をつないでくれた

祭りが人とのつながりを作ってくれた

北勢町阿下喜に生まれた多田さんは、5歳から毎年欠かさず八幡祭に参加しています。「みこしを担がないと夏を感じない」と語るほど、八幡祭とともに育ちました。しかし、大学進学と就職で地元を離れることに。その間、毎年帰省して祭りへの参加を続けました。

「離れていても、祭りに参加すれば仲間に会える。それが楽しみでした。祭りに参加すると、地元の人が年齢関係なく声をかけてくれる。人の輪が広がっていくことが嬉しかった」と話します。隣に誰が住んでいるかも分からなかった都会暮らしに比べ、地元での人のつながりが温かく感じるようになっていきました。「離れていても、祭りが地域と自分をつなぎとめてくれた。祭りのある地域に生まれて良かった」と語ります。

離れっぱなしはもったいない

多田さんは28歳で地元にUターンしました。「地元を離れて、初めて良さに気づくことができた。だからこそ、離れっぱなしはもったいない」と語ります。

現在、地域の有志団体「阿下喜祭好会」で活動している多田さん。離れている人に地域と関わるきっかけを作れたらと思い、同会のイベントの企画や映像制作の活動にも力が入ります。

地域を盛り上げたい

阿下喜祭好会（あげきさいこうかい）

北勢町阿下喜にある大西神社の祭礼「八幡祭」。その八幡祭を盛り上げようと活動する有志の団体です。
今年は、地域を盛り上げようと、八幡祭の映像を制作し、大西神社で上映会をおこないました。

阿下喜祭好会の活動を通じて

松﨑 茂生さん

北勢町阿下喜で美容院を営む松﨑さん。お店の移転を機に10年前にいなべ市に移住しました。8年前に阿下喜祭好会に加入し、八幡祭を通じて地域の人とどっぷりとつながっていったそうです。

「祭りが途絶えたら、地域らしさが無くなってしまう。祭りを続けるには、人口減少が問題ではなく、地域への想いが大切です。阿下喜祭好会のメンバーは20～30代が多く、地域を盛り上げようと動き出している。その若い世代のサポートをしていきたいですね」

新しい風を取り入れる土壌
立田地区

今も昔も、外からの風と地域の人が融合しながら新しい動きを見せる立田地区。
その取り組みには、わたしたちが地域の未来を考えるときのヒントが詰まっていました。

地域から子どもが消える―　立ち上がった住民たち

藤原町篠立と古田の２つの自治会からなる立田地区。この地区では、今も昔も地区内外の人が協力して地域づくりに取り組む姿が見られます。その中心には、常に小学校の存在がありました。

立田地区は、地区にあった白石工業桑名工場が昭和51年に操業を停止したのを機に、人口減少が進みました。昭和62年には、次年度に立田小学校で複式学級が複数出来ることがわかり、住民に強い危機感が広まったそうです。

「このままでは、地域から子どもが消えてしまう」

そう危機感を感じた立田地区の人々は、全国での視察を経て、昭和63年から都市の子どもを受け入れる山村留学に取り組みました。当初は、地区の住民の家に子どものみを受け入れる「里親方式」で開始しました。

「里親だけに子育てを任せとったらあかん」

学校存続の思いを共有していた住民たちは、川下り、登山、スキーなど多くの行事を開催し、積極的に子どもたちに関わっていきました。子どもとの関係を通して、地域の住民が協力し合うようになりました。

地域を維持するには、若い世代が移住して、住民とともに地域づくりを進める必要があると考え、平成３年からは家族で移住し通学する「家族留学」を始めました。上下水道完備や山村留学専用住居の造成などを行い、「義理ごと」と呼ばれる地区で続く古い慣習を廃止し、若い世代が転居しやすい環境を整えました。

立田地区では、地域に住む人が生き生きと暮らせるようにと、多くのボランティア団体が作られました。親子で自然体験をする「土曜学校」や、地区の環境整備や秋祭りを運営する「青壮年部」などがあります。移住してきた若い世代が積極的にこれらの活動に参加する姿が見られ、それが地域住民にとって良い刺激になり、立田地区特有の活発な地域づくりにつながりました。

1. 空き教室を利用したヨガ教室の様子 2. 地域の人たちの手でつくるイベント「秀真楽市」。今年の夏に開催した時の様子 3. 立田地区に住む人が自分の趣味をいかして出店

廃校した小学校跡地を地域内外の拠点にと動き出す

藤原町の５つの小学校が統合されることになり、立田小学校は平成29年３月に閉校しました。閉校を機に29年続いた山村留学も終了。しかし、立田地区の人々は、地域づくりの歩みを止めませんでした。

「なんとか学校を残せやんのやろか」

地域から聞こえてくるこうした声をもとに、地区の人々は廃校になった校舎の活用に動き出します。立田地区活性化協議会を作り、議論を重ね、校舎を地区内外を問わず人と人の交流の場にしようと決めました。

今年度からは、健康・娯楽・福祉の場として空き教室の活用を始め、ヨガ教室や将棋などを行う場として開放しています。篠立の自治会長の三羽隆男さんは「子どもから高齢者までみんなの集まる場にしていきたい」と話します。また、校舎の敷地では昨年から「秀真楽市」というイベントが開催され、地域内外の人が訪れる新たなコミュニティの場になりつつあります。

廃校した校舎を地区で運営することは、同時に地区の人々の負担が増えることになりました。しかし、いろんな人と協力して共に生きる風土が育まれている立田地区では、校庭の草刈りや雪かきなど地域の住民が積極的に取り組んでいます。地区の未来を自分たちの手で作り上げてきた立田地区の人々。きっとこれからも、その歩みは止まることはないでしょう。

広がる小学校跡地利用

秀真（ほつま）の里 とこわか

色んな人と関わってふれあいの場になれば

ヨガや元気ダンスなど５種類の教室を開催しています。いつまでも健康にとの願いをこめて「とこわか」と命名。今年１月から、地域おこし協力隊の土肥仁那さんが地区と連携しながら運営に協力。

土肥 仁那さん

秀真楽市

子どもたちが主体的に開くお店もあります！

食べ物、飲み物、手作り雑貨、趣味をいかした体験ブースなど内容も盛りだくさんのイベント。出店者は立田地区の住民。その半数を５年以内に移住した人が占めます。元地域おこし協力隊の加藤潤一さんが主催。

加藤 潤一さん

元藤原町教育長
三輪 了啓さん

interview　長年、地域のコーディネーターの役割を担う

心の豊かさと地域づくりはつながっている

これからの時代は、学力や財力ではない、心の豊かさが重要となるでしょう。心の豊かさを感じるには、やる気や好奇心などの非認知能力が大きく影響します。私は退職の翌年に自治会長をしたことがきっかけで、地域と深く関わるようになりました。好奇心を持って地域を知ると、人とのつながりが出来る。地域の人とのつながりが広がると、絆が生まれ、心が豊かになる。心の豊かさと地域づくりはつながっていることを実感しました。

いろんな人と協力できる力も非認知能力と言えます。外から来た若い世代が「秀真楽市」というイベントを企画したのをみて、同世代に声を掛け一緒に参加しました。グローバル化が進む今、この力がますます重要に。新しい文化の芽生えを楽しみながら、協力していきたいです。

外から来た人が地域を光らせてくれる。地域の人がそれを支える。そして、両者をつなぐコーディネーター役が地域には必要不可欠と考えています。

京都産業大学
現代社会学部教授
耳野 健二さん

interview　大学 × 地域

地域の未来をともに作る

平成26年に京都産業大学といなべ市で地域の活性化とその人材育成のための連携協力に関する包括協定を締結して以来、本学生と立田地区との間で交流を続けてきました。これまで、地区の歴史をもとに、紙芝居や絵本、動画の作成をしてきました。

立田地区を訪れると「外に開かれている」と感じます。三輪了啓さんや、山村留学導入に尽力した高橋賢次さんなど地域のリーダーが、学生を積極的に受け入れ、学びの後押しをしてくれます。地域で子どもを育てようという意識が住民に根付き、文化的な蓄積が外の人の柔軟な受け入れにつながっていると考えます。

本学生は、まさに立田地区の関係人口。学生からは「地域の歴史を知ることが自分の学びになった」という声があり、地域に行く側にとっても得るものが多いと感じています。

▲学生の発案で３月にモニュメントを設置

(左から)森 那菜さん、河瀬 絢名さん、伊藤 鈴さん、二宮 凪央華さん、水谷 瑠夏さん、川瀬 諒子さん、日沖 蒼生さん

阿下喜駅にイルミネーションを取り付けるボランティア活動に参加。チームで協力する大切さを知りました(森さん)、これからも地域に貢献したい（河瀬さん)、市内が楽しいと、外から人がたくさん来るのでは（二宮さん)、やってみて良かったです（水谷さん)、地域の人に「いいね」と声を掛けてもらえた（川瀬さん)、いなべは人と人の距離が近くて良い！（日沖さん)

斉藤 成香さん

地元立田の思い入れのある場所をツリーイングに活用すると知り、何か手伝えればと思いスタッフに参加。こうして地域内外からたくさんの人が来てくれるのを見ると、この地が誇らしく思えます。

高橋 賢次さん

外からやってくる人に対して、斜に構えていたら地域は消えます。この地を好んで来てくれた人と、一緒に地域をつくっていけたら生き生きとした地域になる。今こそ地域の未来を考えるときです。

加藤 潤一さん

受け継がれてきた地域という土台に、外からの人が新しい風を持ち込む。うまく響き合って、やがてその地の風土になっていくのでは。

三羽 隆男さん

楽しみながら地域で暮らしていきたいですね。

藤田 久光さん

地域の人の手で、地域の場を作り上げている立田の風景をぜひ見てほしい。

児玉 光明さん

立田にやって来る人に対して、「よそ者」という考えはありません。地域に関わる姿に、区別はありません。

藤本 孝徳さん

地域の先人の取り組みを引き継いでいきたいという大きな思いがあります。

市の取り組み

高校生と一緒に未来を考えたり、自由な発想で未来を描いたりと、市で行われている地域の未来を考える取り組みを紹介します。

INA-CON　高校 × 地域

平成 28 年度から毎年実施している、いなべ総合学園高等学校の生徒が参加して、まちづくりのアイデアを出すコンテストです。3 月には、阿下喜駅に生徒が提案したイルミネーションを設置しました。設置のボランティアに参加した伊藤鈴さんは「まちづくりに携われて嬉しかったです」と話します。

妄想会議　妄想 × 地域

市でしてみたいことや理想のまちの姿などを自由に話し合う場として、昨年 12 月に第 1 回が開催されました。参加に住所要件はなく、いなべ市が好きな人が参加しました。市内外からの出席者により新たな発想が提案されました。

人は減るけれど、未来は明るい？

人口はこれからも減少が続きます。地域づくりを進めるうえで、関係人口などの多様な形で地域に関わる存在は、ますます欠かせないものになるでしょう。地域にその存在を受け入れる土壌が、あるか、ないか。ともに地域づくりに取り組めることができるか。人口減少が進む今、地域のあり方が問われているのです。

取材の最後に三輪了啓さんが「立田地区も人は減っています」と切り出しました。「でも、ここの人たちならきっと大丈夫。未来は明るい。私はそう確信しています」と力強く語ってくれました。

立田地区から感じる、多様な人を受け入れる土壌と主体性。そこには、目指すべき地域の未来がみえるようです。

もうそうミーティング
妄想会議

一緒に地域の未来を妄想しませんか？

日時　令和 4 年 1 月 29 日(土)
　　10：00 ～ 11：30
場所　シビックコア 2 階
対象　いなべ市民、いなべ市が好きな人
　　※年齢不問、キッズスペース有り
定員　20 人程度
申込方法　申し込みフォームまたは電話、
　　メールにて申し込み
問 GCI　T 72-7705
E info@inabe-gci.jp